

「特集」まえがき(国際シンポジウム「東アジアの観光動態に関する学際的研究」特集論文)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 勅之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024959">https://doi.org/10.14945/00024959</a>

## 「特集」 まえがき

山田 勅之

本特集は2017年12月18日に開かれた国際シンポジウム「東アジアの観光動態に関する学際的研究」に寄せられた論文からなる。また、静岡大学人文社会科学部の大野旭（楊海英）教授と北海商科大学商学部の石原享一教授、そして私大阪成蹊短期大学観光学科の山田勅之の3名が進めてきた科研費基盤研究B「新疆ウイグル自治区、内蒙古自治区の観光動態に関する総合研究」と大阪成蹊短期大学観光学科の金志善准教授が進める科研費基盤研究C「消費者の親和性が旅行先に与える役割と影響—一口コミサイトの分析を通じて」の研究成果論文でもある。したがって、本国際シンポジウムは静岡大学人文社会科学部アジア研究センターと大阪成蹊短期大学観光学科の共同主催という形をとり、会場は静岡大学人文社会科学部アジア研究センターからご提供いただいた。

執筆者4名の研究発表テーマとその概要は以下の通りである。

まず、金志善准教授の「消費者の店舗選択行動に関する研究」では、アジアのインバウンド大国・韓国の免税市場において、店舗属性と販売パターンの関係性を日本と中国の観光客を比較検討することによって、従業員の接客態度の重要性が再確認されるとともに日中間の差異を明らかにした。

石原享一教授の「中国の観光産業政策と観光統計の整備—“土基準”（自国基準）と“洋規矩”（国際基準）とは折り合えるか」では、中国研究では基礎となる中国国家统计局の統計資料（土基準）と観光研究において同様に基礎資料となる国家旅游局の統計資料（洋規矩）との差異の指摘は、改めて中国研究者に資料の取り扱いの難しさを再認識させるものであった。さらに両者の比較分析から中央レベルと地方レベルの様々な矛盾も浮き彫りになった。

私山田勅之の「新疆ウイグル自治区の今—民族問題と観光」では、新疆ウイグル自治区の2つの官製の祭（トルファンぶどう祭りとホータン玉石文化観光祭）とカシュガル旧市街地の再開発の実情分析から、頻発する民族騒動の対応に苦慮する政府の姿が観光の現場に顕現している実態を明らかにした。

大野旭（楊海英）教授の「王昭君は『民族団結のシンボルか』—内モンゴル自治区における歴史人物の観光資源化」では、内モンゴル自治区において、民族団結のシンボルとして利用される王昭君が、どのように観光資源化されているのか、分析検討することによって、国家によって創造される「民族文化」と民族問題の相関性を浮き彫りにした。

いずれの発表者も大なり小なり中国を対象としている点、昨今の中国の存在感の大きさをあらためて実感する内容であった。ただ、山田の発表はトルコ系イスラム教徒のウイグル族を対象とするものであり、大野教授の発表はモンゴル国と中国の狭間に位置する「少数民族」・モンゴル族を対象とするものであり、金准教授の発表は日中韓の相関性を観光という現場で分析するものであり、そして石原教授の発表は、中国研究において、ある意味根幹を支える部分の再検討を促すものである。したがって、本シンポジウムのテーマである「東アジア」にふさわしい内容であったと思われる。

また、4名の専門分野はマーケティング、経済学、文化人類学、歴史学と全く異なっているが、そもそも観光自体が、様々な専門分野間との垣根が低く、かつ相互交流性が高い性格を有していることを踏まえると、学際的に観光動態の分析検討を行うのに相応しい陣容であったのではないだろうか。

コメンテーターを務めていただいた静岡大学人文社会科学部の戸部健准教授には、このように「幅」のある発表テーマ群に対して、一つ一つの確かなコメントをいただいた。特に「一带一路」と観光との関係性については、今後大きな課題になると考えられる。

最後に、今回のシンポジウムの開催にあたり、静岡大学人文社会科学部アジア研究センターから多大な援助を受けた。ここに記して関係各位に感謝を申し上げる。